

2023. 12. 24. 主日礼拝説教
聖書： マタイによる福音書2章16～18節
『 生と死のはざまから 』

クリスマスおめでとうございます。

本日の箇所は「ヘロデ、子供を皆殺しにする」という凄惨な小標題が掲げられます。なぜマタイはこのような箇所を生誕物語に加えたのでしょうか。さらに言えば、なぜマタイは生誕物語を作ったのでしょうか。そもそもマタイによる福音書の著者(もちろんマタイという名前ではありません)の活動時期は、70年のユダヤ戦争終結から始まり、この福音書が描かれた80年代半ばであろうと考えられます。当時はユダヤ教ばかりかローマの迫害が日増しに強くなって行くという危機意識が初代教会内にあったことが生誕物語執筆の動機の一つかと考えられます。

マタイは生誕物語を散見する伝承の中から特に父親ヨセフのものを収集して用いています。それに対してルカは母親マリアの伝承を用いています。マタイの描きは、ヨセフを軸として当時の慣習やしきたり、ヘロデの横暴やエジプト逃亡等の社会的変遷を一族の家長としての男性的視点から記します。ただ本日の箇所は、わが子を失った母親ラケルの例を描き出しております。

この引用はエレミヤ書31;15からですが、訳が70人訳とはかなり異なっているため、おそらくマタイ自身がヘブライ語からいつものように簡略化しながら翻訳したものと考えられます。前721年、北王国イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、人々は捕虜として連行される途中にラマを通りました(エレ40;1)。ラケルもその中にいて、その悲劇に涙したという記事です。

この引用は、ヘロデに集約される「二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」(16)という記事の補強です。実際、ヘロデは皇帝アウグストゥスをして「ヘロデの息子であるより豚の方がまだ安全だ」と言わしめたほど悪名高い王で、妻やその親族だけでなく自分の息子3人までも手にかける有り様でした。100年後のマタイの時代でさえまだその悪評は絶えていなかったのでしょうか。マタイはこれを利用して作文したのです。それ

はイエスの誕生をモーセの誕生(出エ 1;15-2;10)になぞらえて旧約の預言の成就を生誕物語に組み込むことで強調したのであらうと考えられます。

これらの記事を通して、マタイが伝える生誕物語とは、一つの命の誕生にはいくつもの命の失いがあるということなのです。つまり、生きるという行為には必ず愛する者たちの支えがなければ人は生きては行けないという事実が描き出されてゆくのです。言い換えれば、その愛する者の「死」の意味を受け入れるとき、人は初めて自らの「生」を受け止めて生きることが出来るのだという宣言なのです。

わたしたちは自分の愚かさや他者の悪意、社会の矛盾や運命の重荷に苦しみます。生きるとは苦しむことなのです。しかし、そんな苦しみばかりでなく、正しいことを求めての苦しみや愛するがゆえの苦しみもあります。こういう苦しみは避けることが出来ません。もし逃げようものなら一層の苦しみになって戻ってきます。それはむしろ自分自身に向かって課すべき苦しみなのです。この苦しみを自らに課し、じっと耐えるのです。わが子を亡くしたラケルがそうであったように、ただ耐えて生きるのです。それが愛する者の「死」に対するわたしたちの「生」なのです。ここに神によって創造されたわたしたち人間の尊厳があるのです。

マタイは生誕物語とは生き直す物語であることを呼び掛けるのです。